

1. まえがき 各層ごとの材料の性質が異なる多層中空および多層中空円柱が温度変化を受けるとき、熱膨張係数はじめ物性値の違いにより多層構造の内部に固有応力が生じる。このときの弾性応力解析を行い、変位、応力の厳密解を誘導した。その結果、多層コンクリート円柱を構成する材料の諸物性および断面諸元等とパラメータとし、温度応力をもとめそれらを検討したものである。

2. 解析理論

図-1は、多層円柱の微小要素に作用する応力を示す。円柱が同心円状の多層構造であり、軸対称問題となるので応力成分のうちせん断応力 $\tau_{\theta z} = 0$ となる。したがって、半径方向に関するつり合い式は(1)となる。

$$\frac{\partial \sigma_r}{\partial r} - \frac{\sigma_r - \sigma_\theta}{r} = 0 \quad (1)$$

次に、平面ひずみ問題の場合のひずみと応力との関係式と(2)(3)に、ひずみと半径方向の変位 u の関係式と(4)(5)に示す。また、これらの式によって求められる応力と変位の関係式と(6)(7)に示す。

$$\epsilon_r - (1+\nu)\alpha T = \frac{(1-\nu)}{E}(\sigma_r - \frac{\nu}{1-\nu}\sigma_\theta) \quad (2)$$

$$\epsilon_\theta - (1+\nu)\alpha T = \frac{(1-\nu)}{E}(\sigma_\theta - \frac{\nu}{1-\nu}\sigma_r) \quad (3)$$

$$\epsilon_r = \frac{\partial u}{\partial r} \quad (4) \quad \epsilon_\theta = \frac{u}{r} \quad (5)$$

$$\sigma_r = \frac{E}{(1-2\nu)(1+\nu)} \left\{ (1-\nu)\frac{\partial u}{\partial r} + \nu\frac{u}{r} \right\} - \frac{E\alpha T}{1-2\nu} \quad (6)$$

$$\sigma_\theta = \frac{E}{(1-2\nu)(1+\nu)} \left\{ \nu\frac{\partial u}{\partial r} + (1-\nu)\frac{u}{r} \right\} - \frac{E\alpha T}{1-2\nu} \quad (7)$$

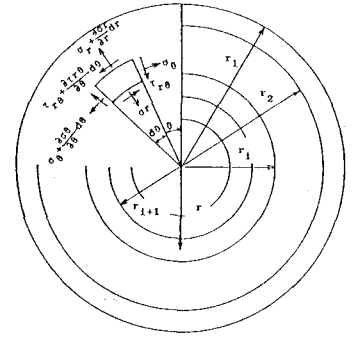


図-1

式(6)(7)をつり合い(1)に代入すると次のような微分方程式が得られる。

$$\frac{\partial^2 u}{\partial r^2} + \frac{1}{r}\frac{\partial u}{\partial r} - \frac{u}{r^2} = \frac{1+\nu}{1-\nu}\alpha\frac{\partial T}{\partial r}$$

これより、変位が式(8)のように得られる。また求めた変位を式(6)(7)に代入し、応力が式(9)(10)のように得られる。

$$u = \frac{1+\nu}{1-\nu}\alpha\int T r dr + C_1 r + \frac{C_2}{r} \quad (8)$$

$$\sigma_r = \frac{E}{1+\nu} \left\{ -\frac{1+\nu}{1-\nu}\alpha\int T r dr + \frac{C_1}{1-2\nu} - \frac{C_2}{r^2} \right\} \quad (9)$$

$$\sigma_\theta = \frac{E}{1+\nu} \left\{ -\frac{1+\nu}{1-\nu}\alpha T + \frac{1+\nu}{1-\nu}\alpha\int T r dr + \frac{C_1}{1-2\nu} + \frac{C_2}{r^2} \right\} \quad (10)$$

多層円柱を構成する各層に対し、いま、外側から1層、2層、……とする。そのとき、任意の層 i における変位、応力は、式(11)および(12)(13)のように与えられる。ここで、 r は中心からの径であり $r_{i-1} \leq r \leq r_i$ とする。

$$u = \frac{1+\nu_i}{1-\nu_i}\alpha_i\int \frac{r^2 - r_{i-1}^2}{2} + C_{1i} r + \frac{C_{2i}}{r} \quad (11)$$

$$\sigma_r = \frac{E_i}{1+\nu_i} \left\{ -\frac{1+\nu_i}{1-\nu_i}\alpha_i\int \frac{r^2 - r_{i-1}^2}{2} + \frac{C_{1i}}{1-2\nu_i} - \frac{C_{2i}}{r^2} \right\} \quad (12)$$

$$\sigma_\theta = \frac{E_i}{1+\nu_i} \left\{ -\frac{1+\nu_i}{1-\nu_i}\alpha_i T + \frac{1+\nu_i}{1-\nu_i}\alpha_i\int \frac{r^2 - r_{i-1}^2}{2} + \frac{C_{1i}}{1-2\nu_i} + \frac{C_{2i}}{r^2} \right\} \quad (13)$$

これらの式中の積分定数 C_{1i} 、 C_{2i} は応力および変位に関する境界条件により決定される。

i) n 層中空円柱

$r = r_1$ で半径方向の応力に関し、 $\sigma_r = 0$ であるので

$$\sigma_{r1} = 0 = \frac{E_1}{1+\nu_1} \left\{ -\frac{1+\nu_1}{1-\nu_1}\alpha_1\int \frac{r^2 - r_1^2}{2} + \frac{C_{11}}{1-2\nu_1} - \frac{C_{21}}{r_1^2} \right\} \quad \text{したがって} \quad \frac{C_{11}}{1-2\nu_1} - \frac{C_{21}}{r_1^2} = \frac{1+\nu_1}{1-\nu_1}\alpha_1 T \left\{ 1 - \left(\frac{r_1}{r_1}\right)^2 \right\} \quad (A)$$

$r = r_2$ では、1層目と2層目の境界面であり、変位および応力が等しいことから

$$u_2 = \frac{1+\nu_1}{1-\nu_1}\alpha_1\int \frac{r_2^2 - r_1^2}{2} + C_{11}r_2 + \frac{C_{21}}{r_2}$$

$$\text{したがって} \quad C_{11}r_2 + \frac{C_{21}}{r_2} - C_{12}r_2 - \frac{C_{22}}{r_2} = \frac{1+\nu_2}{1-\nu_2}\alpha_2 T \frac{r_2^2 - r_1^2}{2}$$

$$u_{22} = \frac{1+\nu_2}{1-\nu_2}\alpha_2\int \frac{r_2^2 - r_1^2}{2} + C_{12}r_2 + \frac{C_{22}}{r_2}$$

$$C_{11} + \frac{C_{21}}{r_2^2} - C_{12} - \frac{C_{22}}{r_2^2} = \frac{1+\nu_2}{1-\nu_2}\alpha_2 T \frac{1 - \left(\frac{r_1}{r_2}\right)^2}{2} \quad (B)$$

